＜実践事例＞

学生 FD サミット 2014 夏 分科会「一目瞭然！みんなで貼ろう授業アンケートのイイネ！」の実施を通じた一考察

神谷　諒[1]・田村　玖美[2]・徳田　義貴[3]・竹谷　美里[3]・
林　美希[4]・飯田　実乃里[5]・福島　寛史[6]・森脇　可奈子[7]

大学で実施される「授業アンケート」は、学生が対象とされているにもかかわらず、アンケート実施の意義が十分理解できないため回答への意欲を見出しにくい学生も少なくない。本稿では、他大学の授業アンケートの取組を知り、自大学の取組を振り返ることで、授業アンケートをより理解する機会として、京都産業大学学生 FD スタッフ AC 燦が学生 FD サミット 2014 夏で企画した分科会「一目瞭然！みんなで貼ろう授業アンケートのイイネ！」の内容を報告し、AC 燦が自大学の授業アンケートの取組と他大学の事例とを比較することで意識化した、学生 FD スタッフとして授業アンケートに取り組むべき課題と今後の展望について述べる。

キーワード：学生 FD サミット、大学共創、授業アンケート、授業改善、学生目線

1. はじめに

2014 年夏、京都産業大学学生 FD スタッフ AC 燦（以下「AC 燦」とする）は学生 FD 活動に関わる全国の学生・教員・職員が一堂に会する「第 10 回 学生 FD サミット」を企画・運営し[1)]、学生 FD 活動が行き当たる課題について、「何のために、誰のために」との視点で分科会[2)] を企画した。本稿では、その中で「授業評価アンケート（以下「授業アンケート」とする）」をテーマとした分科会「一目瞭然！みんなで貼ろう授業アンケートのイイネ！」の実施とその振り返りによる一考察を報告する。

AC 燦が「授業アンケート」を分科会に取り上げた背景には、企画をした学生自身が、授業アンケートが「何のために、誰のために」行われているのか分からない、授業アンケートは本当に必要なのだろうかと疑問を持っていたためである。しかし、授業アンケートについて十分な知識がなければ、その是非を議論することもできない。そこで、この分科会では、他大学の特徴のある授業アンケートの実践を知り、参加者が対話を通じて自大学の授業アンケートを振り返り、より良いアンケートについて考えるきっかけとなる場を提供したいと考えた。

学生を対象とした授業アンケートは、大学の授業改善を目的に学生の意見を収集する手段として実施される。学生 FD 活動も、大学や授業の改善に学生の視点を反映する取組であることから、学生も授業アンケートの取組を知ることは重要であると考えられるが、これまで学生 FD サミットの分科会で授業アンケートに関する企画は考案されてこなかった。全国から大学の FD 活動に関心を持つ学生・教職員が結集する学生 FD サミットを機に、学生・教職員が対話を通じて、授業アンケートの理解を深める分科会の実施は意義があるものと考えられた。また、この分科会では、事例紹介する登壇大学の発表者にとっても、参加者から良い評価を受けることで自らの取組の良い点を客観視し、活動へのモチベーションの維持・向上に繋げられるようにしたいと考えた。

本稿では、まず「1. はじめに」で、分科会「一目瞭然！みんなで貼ろう授業アンケートのイイネ！」に至った経緯と本分科会の意義について述べた。「2. 分科会の概要と構成」では、実施プログラムについて述べ、「3. 各大学による事例報告及びグループセッション」で、登壇大学から紹介された授業アンケート実施の概要、参加者による「イ

[1] 京都産業大学　経済学部 2 年次、[2] 京都産業大学　経営学部 2 年次、[3] 京都産業大学　経営学部 3 年次、[4] 京都産業大学　経営学部 4 年次、[5] 京都産業大学　外国語学部 3 年次、[6] 京都産業大学　法学部 1 年次、[7] 京都産業大学　学長室・教育支援研究開発センター

イネ！」表明の内容、グループセッションでの質疑応答や意見交換の概略を報告し、「4. 自大学への振り返り」では、本分科会が目的とした自大学への持ち帰りの一例として京都産業大学の「授業アンケート」の取組内容と札幌大学・名古屋大学での取組との比較による考察を述べ、最後に「5. おわりに」で本稿を総括する。

2. 分科会の概要と構成

本章では本分科会のプログラム内容を紹介する。実施の詳細については第3章に報告する。

2.1. 分科会の概要

タイトル：「一目瞭然！みんなで貼ろう授業アンケートのイイネ！」
日時：2014年8月25日（日） 13：10～14：40
場所：京都産業大学　雄飛館2階ラーニングコモンズパフォーミングスペース
参加者数：70名
主催：京都産業大学 学生FDスタッフAC燦
協力：札幌大学 学生FD委員会 札大おこし隊
名古屋大学 理学部物理学教室 学生教育委員会

2.2. 分科会の構成

分科会は次のような流れで実施した。

(a) 分科会趣旨説明（概要・登壇者紹介） 5分
(b)「授業アンケート」実施の事例報告 15分
・京都産業大学
・札幌大学
・名古屋大学 理学部物理学教室
(c) 参加者による「イイネ！」の表明 10分
(d) グループセッション 40分
・京都産業大学
教育支援研究開発センターグループ
・札幌大学
学生FD委員会札大おこし隊グループ
・名古屋大学
理学部物理学教室学生教育委員会グループ
(e) 全体共有・まとめ 15分
(f) アンケート記入 5分

2.2.1. 事例報告

事例報告では、サミット開催校である京都産業大学の他に、学生目線の授業改善を目指した授業アンケートの実施に取り組んでおられる札幌大学・名古屋大学の学生・教職員を登壇者に迎え、各々の取組を簡潔に紹介していただいた。

開催校の京都産業大学からは、佐藤賢一氏（教育支援研究開発センター長・総合生命科学部教授）より、現在、教職員で作成・実施されている授業アンケートの取組が紹介された。札幌大学の堀江育也先生（地域共創学群准教授）と学生FD委員会「札大おこし隊」の川口ゆりさん（札幌大学女子短期大学部キャリアデザイン学科2年次）からは、授業アンケートを学生と教員で共に作成しようとされている事例が紹介された。また、名古屋大学理学部物理学教室学生教育委員会の千賀智史さん（名古屋大学理学部物理学科2年次）からは、理学部物理学教室という単独学科で学生自身が授業アンケートを作成・実施している事例が紹介された。

図1. 事例報告の様子

2.2.2. 参加者による「イイネ！」の表明

グループセッションエリアには、学生用と教職員用に模造紙パネルが設置され、各登壇大学の事例報告を聞いた参加者全員が各々自大学の参考にしたいと付箋に書き留めた「イイネ！」を表明する機会を設けた。

図2. 参加者による「イイネ！」の表明

この表明は、「イイネ！」という参加者からの良い評価を目に見える形で登壇大学に伝えるとともに、参加者が授業アンケートを考える上で参考にしたいと考えた視点の傾向を可視化するものともなった。

2.2.3. グループセッション

グループセッションでは、参加者が関心を持った登壇大学のエリアに移動して、質疑応答や意見交換を行った。議論された内容は最後に各登壇大学が発表を行い全体共有された。

図 3.　グループセッションの様子

3. 各大学による事例報告及び グループセッション

本章では各登壇大学の事例報告と参加者による「イイネ！」の表明内容及び、グループセッションでの質疑応答や意見交換を要約して報告する。

3.1. 京都産業大学の授業アンケートの取組

3.1.1. 事例報告

京都産業大学では、授業アンケート実施の仕組みが平成 23 年度に改訂され、現在、一学期中に「教員－学生間の対話シート（以下「対話シート」とする）」と「学習成果実感調査」の 2 種類の授業アンケートを実施していることが報告された。また、その改訂に至った経緯として、平成 22 年度に同学で実施された「第 1 回 学生と教職員が考える FD フォーラム」で、授業の主役である学生・教員には授業に対する考えにギャップがあることが明らかになった[3] ことが報告され、このようなギャップを解消するために学生と教員の対話を重視した「対話シート」と呼ばれる授業アンケートが導入されたことが紹介された。

対話シートは、授業開始から 6 週までに原則全科目の担当教員が実施し、翌週の授業で教員自身が口頭でフィードバックを行うことで、学期後半の授業の進め方に学生の声を反映する仕組みがとられている。一方、学習成果実感調査は、次学期以降のカリキュラム改善に活用する目的で、対象科目を選定して学期末に授業内で実施し、結果の集計･分析を経て改善計画が立てられ、大学のホームページ上にも公開されている。2 種類の授業アンケートを取り入れたことで、学期内の授業改善と学期を越えた教育カリキュラムの改善に活かす取組の双方が行われている。

課題として、設問をクラスに応じて見直すことや授業規模によって設問の回答をどのように捉えるか、またアンケート結果を次年度以降の授業カリキュラムにいかに活かしていくかなどが挙げられた。

3.1.2.「イイネ！」表明に見る、参加者の全体的な関心

参加者から京都産業大学に表明された「イイネ！」の傾向を、学生・教職員の付箋の合計件数の多い順に表 1 に示す。

表 1.　京都産業大学に表明された「イイネ！」の集計

内容	学生	教職員	合計
対話シートの実施	17	10	27
目的に応じた 2 種類のアンケートの実施	16	5	21
対話を重視する FD 活動	8	5	13
学生と教員の意識のギャップの明確化	5	4	9
学習成果実感調査の実施	2	2	4
その他	5	3	8
合計数	53	29	82

学生・教職員ともに関心が高い内容の順が同じで、「対話シートの実施」、「目的に応じた 2 種類のアンケートの実施」、更には「対話を重視する FD 活動」の順で多くの関心が寄せられた。

3.1.3. 質疑応答・意見交換

グループセッションでは、次の 3 点について参加者と質疑応答や意見交換が行われた。

①対話シートが、学期中に期間を決め単発に終わっていては対話の効果がないのではないかとの疑問が呈され、学生と教員が常にコミュニケーションを取る環境が大切であることが確認された。

②授業アンケートでの自由記述欄の「自由」という文言が語弊を招かないかとの懸念が示された。これに対し、京都産業大学では、自由記述欄は授業に関することを記入するようにアンケート用紙に明文化し、また大学と学生の信頼関係を前提として学生証番号・氏名欄を設けていることが説明され、授業アンケートを受ける学生が趣旨を理解した上で回答することの重要性が強調された。

③ 4 年間の学習成果を調査する仕組みがあるかとの問いがあり、現段階ではその仕組みが取られていないことが説明された。また、授業アン

ケートに限らず大学で実施している各種のアンケートから、授業に特化した事項を抽出することで、学生生活全体の学習成果を振り返る取組ができるのではないかとの考えも示された。

3.2. 札幌大学の授業アンケートの取組

3.2.1. 事例報告

授業アンケートの実施には、学生・教員共にやらされ感や負担感が伴う。札幌大学では、この状況を改善するため、教員が組織するFD委員会に学生FD委員会である「札大おこし隊！」が参加できる権利が与えられ、学生の意見を授業アンケートの改善に活かす取組が行われていることが紹介された。但し、学生FD委員会から提案されたアンケート項目がまだ採用されていない実情も補足して報告された。

授業アンケートは、以前は学期末のみ実施していたが、期末後に結果を公開しても、そのアンケートに回答した学生は授業改善の恩恵を享受できない問題があることから、授業開始から7回目の授業で「授業改善中間アンケート（以下「中間アンケート」とする）」を実施するようになり、現在は一学期に学期末の「学生による授業アンケート調査（以下「期末アンケート」とする）」と併せ2度アンケートを実施している。

中間アンケートは実施後、翌週の授業で教員から学生に結果のフィードバックが行われる。また期末アンケートには担当教員が中間アンケート後に授業改善を行ったかを問う項目があり、改善に向けたチェック機能が設けられている。

その他、授業アンケートは、以前は教員評価のアンケートであったが、少しずつ授業評価や授業改善に繋がる設問に変更し、最近では学生自身にどのようなことを学んだか問いかける設問に変更していることなどが報告された。

3.2.2.「イイネ！」表明に見る、参加者の全体的な関心

参加者から札幌大学に表明された「イイネ！」の傾向を表2に示す。

表2. 札幌大学に表明された「イイネ！」の集計

内容	学生	教職員	合計
各学期2回(中間/期末)のアンケート実施	28	9	37
中間アンケートのフィードバック	28	6	34
学生が教員FD委員会に参加 (学生が授業アンケートの項目を提案)	11	15	26
教員評価から授業評価への変化	9	3	12
その他	8	3	11
合計数	84	36	120

全体として一学期中に2度アンケートを実施していることへの関心が高かったが、学生、教職員の関心が高い内容には異なりが見られた。学生は、学期内に2度アンケートが実施されていることや中間アンケートのフィードバックに高い関心を示したが、教職員は、学生が教員のFD委員会に参加してアンケート項目変更の提案を行っていることにより高い関心を示した。

3.2.3. 質疑応答・意見交換

グループセッションでは、授業アンケートのメリットやデメリット、今後の課題について意見交換が行われた。

授業アンケートのメリットとして、担当教員に学生の生の声が届けられることが挙げられ、学生と教員の関係が希薄な部分をアンケートによって補えるなどの意見が交換された。中間アンケートには、学生の要望に早く対応できるというメリットがあり、期末アンケートに「中間アンケートに答えたか」「担当教員には授業改善の姿勢が見られたか」という質問を設けることで、中間アンケートで出た要望への対応や改善に対し、期末アンケートで評価を受けるサイクルができていることもメリットとして補足説明された。

一方デメリットとして、授業に合わない不必要な質問や教員目線の質問が多かったりすると、学生の返答がおざなりになってしまう問題が挙げられた。また、あまりにネガティブな自由記述があると、教員の心を傷つけるだけで改善に役立たないという意見も出され、アンケートの匿名性についても議論が及んだ。

今後の課題として次の3点が挙げられた。

①アンケートにより授業が改善されていると学生が実感できる形にする必要がある。そのためには速やかな結果の公表や教員による講義の狙い・想いを併せて公開することも考えられる。

②自由記述は、質問の文言を吟味し、建設的な意見が出せるような工夫が必要。

③スマートフォンの普及によりオンライン利用の

授業アンケートがのびる可能性もあり、今後の検討課題と考えられる。

3.3. 名古屋大学理学部物理学教室の授業アンケートの取組

3.3.1. 事例報告

名古屋大学の理学部物理学科では、学生で構成された学生教育委員会が主体となり、理学部物理学科の授業アンケートを作成・実施している。その目的は、教員と学生間の演習量や勉強量の想定と実際のギャップなどを埋めるため、教員に学生の声を伝え、授業をより良くすることにある。改善してほしい内容を学生教育委員会が教員側に伝え、教育に反映してもらうよう働きかけている。

授業アンケートの作成で工夫している例として「理解が難しかったキーワードを教えてください」など、学生目線の項目を取り入れている。

アンケートの実施については教員に依頼をし、各学期末の授業中に実施している。結果のフィードバックは学生教育委員会が集計をし、当期担当教員にメールで結果を知らせ、授業中に教員から学生にコメントをお願いしている。

また教員の会議に学生教育委員会のメンバーが参加し、アンケート全体の報告をし、それを通して来期担当教員の授業計画を立てていただくことをお願いしていることが説明された。

3.3.2.「イイネ！」表明に見る、参加者の全体的な関心

参加者から名古屋大学理学部物理学教室学生教育委員会に表明された「イイネ！」の傾向を表3に示す。

表3. 名古屋大学に表明された「イイネ！」の集計

内容	学生	教職員	合計
学生主体	27	11	38
学生目線の項目	12	18	30
フィードバック	19	8	27
学生の生の声を伝える取組み	4	2	6
その他	4	2	6
合計数	66	41	107

学生は学生主体の取組み、教職員はアンケートでの学生目線の項目にいずれも関心が高かった。また学生の関心が高かったフィードバックについては、アンケートの集計結果を当期担当教員だけではなく来期担当教員にも伝える試みが良いという意見が多く見受けられた。

3.3.3. 質疑応答・意見交換

グループセッションでは、主に次の3点について意見交換が行われた。

①学生主体のメリットについて、学生主体だからこそ、教員の理想と学生の現状のギャップを埋めることが出来たと強調された。

②学生主体で統計も取れているかという質問があり、現状ではアンケートを集計したデータをそのまま教員に渡しているが、今後は統計を取り入れることも検討していきたいということが述べられた。

③物理学教室だけの実施ではもったいないのではないかという指摘があり、登壇者から物理学教室限定であることによるメリットもあるが、他団体や他学科と連携し、広めることも視野に入れたいと述べられた。

4. 自大学への振り返り ～京都産業大学を一例として～

本分科会は、「参加者が、他大学の授業アンケートの取組を学び、自大学に持ち帰って、より良い授業アンケートの実施を考えるきっかけとなること」を目的としていた。本章では、AC燦が行った京都産業大学の授業アンケートの取組と、札幌大学・名古屋大学の授業アンケートの取組との比較・考察を振り返りの一例として報告する。

4.1.1. 札幌大学の取組との比較・考察

本学の取組との類似点として、一学期中にアンケートを2度実施していることや学期途中の授業アンケートの結果を授業内でフィードバックしていることが挙げられる。

相違点として、教員で構成されたFD委員会に学生FD委員会のメンバーが参加して学生の意見を言うことができるところである。しかし、アンケート項目の改善に学生の声を届けるには困難さがあることも事例報告からは伺えた。今後AC燦が教員のFD委員会などに学生の意見を集約して届ける機会がある場合には、連携している教育支援研究開発センターの教職員とより綿密な協議・相談を経て、委員会に意見を提出するなどの方策が必要と考える。

4.1.2. 名古屋大学の取組との比較・考察

本学の取組との類似点として、アンケートの目的が授業に対する学生と教員の考えのギャップを埋めることにあり、また授業内で結果を教員がフィードバックしていることが挙げられる。

相違点として、アンケートの作成・集計を学生が、学科独自で実施していること、アンケート結果を当期担当教員だけではなく、来期担当教員にもフィードバックしていることである。

学生目線の項目の設置や、当期担当教員のみならず来期担当教員に学生からフィードバックを行い、アンケート結果を踏まえ授業手法の改善につなげる取組は、学生の意見を授業改善に反映させる上で非常に魅力がある。

本学で学期途中に行われる対話シートにも、学生目線の項目を設け、学生が求めるものを明確にできれば、授業担当教員とのコミュニケーションを更に図ることにつながると考える。そのような環境を作ることで、学生の意見が授業に反映されやすくなり、学生と教員の距離が縮まり、結果として授業全体の質が向上するのであろう。今後のAC燦の活動に取り入れる参考としたい。

5. おわりに
～京都産業大学学生FDスタッフAC燦がこれから目指すところ～

本分科会の企画段階で、AC燦には、授業アンケートは必要ないのではないかという疑問があった。多くの学生は授業アンケートの意義が分からず、授業改善に役立っているのかも分からないので、アンケートに適当に回答しているとの現状認識もあった。一方で、授業アンケートは授業を良くするための一つの手段であり、学生にとっては自分たちの考えを教員や大学に届ける機会とも言われている。では、授業アンケートをより活用する方法はないのか、授業アンケートについて学生自身が、多くの学生・教職員に問いかけ、その問いかけから、これから活用出来る授業アンケートの方向性を見出せないだろうか。今回の分科会を通じて、様々な大学の授業アンケートの取組や活用方法を聞き、理解していく中で、授業アンケートが活用されていないのだとすれば、それはなぜなのか、その課題を学生からも見つけ、改善につなげるのも、今後、AC燦の活動の射程になるのではないかと考えるに至った。

授業アンケートの取組に今後、AC燦も学生FDスタッフとして関心を払い、京都産業大学の学生・教員・職員の三者で取組む授業改善の活動へと発展させていきたい。

謝辞

本分科会の開催において、企画に賛同し協力くださった札幌大学の堀江育也先生および札大おこし隊の川口ゆりさん、また名古屋大学物理学教室学生教育委員会の千賀智史さんはじめとした皆さま、京都産業大学の佐藤賢一氏に深く感謝致します。

注

1）2014年8月23日（土）・24日（日）に京都産業大学で開催された「学生FDサミット2014夏－あなたがキヅク未来－」（主催：京都産業大学学生FDスタッフAC燦・教育支援研究開発センター）には、全国から61大学、480名の学生・教職員が参加した。

2）学生FD活動が行き当たるいくつかの課題について検討・企画された分科会は、以下の5つである。

(1)「学生FDはじめてみました」
(2)「一目瞭然！みんなで貼ろう授業アンケートのイイネ！」
(3)「これさえあれば安心！！学生FD広報ガイド……を作ろう！！」
(4)「ファシリテータのしゃべりバナレに次の一手」
(5)「学生FD七転び八起記～こんな失敗しちゃダメよ～ダメダメ！～」

3）このフォーラムでは「よい授業とは」をテーマに参加した学生・教職員でディスカッションが行われ、学生が考える「よい授業」は、授業のやり方がよい授業であるのに対し、教員が考える「よい授業」は、コンテンツのよい授業で、学生と教員には授業に対する考えにギャップがあることが確認された。

Becoming Conscious of our University's Classroom Questionnaires by Studying Other Universities' Case Reports — A Session Report on our "Likes" regarding Classroom Questionnaires —

Ryo KAMIYA[1], Kumi TAMURA[2], Yoshiki TOKUDA[2], Misato TAKETANI[2]; Miki HAYASHI[2], Minori IIDA[3], Hirofumi FUKUSHIMA[4], Kanako MORIWAKI[5]

Classroom questionnaires at university are conducted to improve teaching quality and courses for

the benefit of students; however, many students lack motivation to answer such questionnaires as they do not understand their value. This article reports on a session entitled “Let’s Share and Talk about Our Likes regarding Classroom Questionnaires” held by Kyoto Sangyo University’s Students’ FD Association (SAN) at the Student-initiated Summit in summer 2014. The session was held with the aim that participants could give more consideration to their university’s approach to classroom questionnaires by learning from and comparing with other universities’ procedures. Through the reflection that followed the session, SAN members realized the challenges surrounding the implementation of classroom questionnaires and became more conscious of their role as student FD staff in making the questionnaire surveys truly beneficial to university students.

KEYWORDS: Student-initiated faculty development summit, Academe co-creating, Classroom questionnaire, Improvement, Student's perspective

2015 年 2 月 23 日受理

1 Faculty of Economics, Kyoto Sangyo University
2 Faculty of Business Administration, Kyoto Sangyo University
3 Faculty of Foreign Studies, Kyoto Sangyo University
4 Faculty of Law, Kyoto Sangyo University
5 Center for Research and Development for Educational Support, Kyoto Sangyo University